

第 11 回 J A 人づくり研究会・総会 開催要領

1. 開催日

平成 23 年 8 月 19 日（金）11 時～午後 5 時

2. 開催場所

東京都千代田区大手町 1-3-1 JA ビル 36 階 大会議室

3. 今回の研究テーマ

「女性の力で地域に風を」

これまで JA 人づくり研究会において、「地域を興す人材創造」、「JA は地域貢献にどう関わるか」、「組合員参画型の事業と人材のイノベーション」などをテーマとして実践事例の紹介をしてきた。

そうした中で、地域興しに欠かせない「女性パワーの活用とその方法」を常に意識してきた。

女性を正組合員として迎えその比率が 40%を超える JA が存在している中で、女性のパワーと能力をどう活かしていくかが問われている。

男性中心に行われてきた JA の運営や事業展開の限界を認識するとともに、男女共同参画による地域に根ざした活動や事業をどう進めていくかを探ることとする。

4. 参加対象

JA・連合会・中央会の常勤役員。

なお、JA・連合会・中央会の職員はオブザーバーとして参加できる。

（誠に恐縮ですが、会場の都合により定員 70 名とさせていただきます。定員をオーバーした場合は、常勤役員の方のご参加を優先させていただきますので、あらかじめご了承ください）。

5. 参加費

参加費は会員 1 万 5 千円、会員外 2 万円とする（宿泊は各自でご手配ください）。なお、1 団体が複数参加する場合（オブザーバーも含む）は、2 人目から 1 万円とする。

参加費については「第 11 回研究会参加費」と明記し、下記口座に 8 月 12 日までに振り込んでください。

振込口座： 農林中央金庫 本店 普通預金

口座番号： 5 5 4 2 7 6 0 JA 人づくり研究会

第11回JA人づくり研究会 プログラム

場所：東京都千代田区大手町 JAビル 36階 大会議室

10：30 受付

11：00 平成23年度 JA人づくり研究会総会

11：45 昼食・休憩

13：00 第11回JA人づくり研究会・開会

代表レポート及び問題提起 今村奈良臣代表

13：20 パネルディスカッション「女性の力で地域に風を」

コーディネーター

JC総研 客員研究員 和泉真理

パネリスト

JA八戸・監事 佐野房

JAあづみ 池田陽子

JAいわて花巻・理事 高橋テツ

JAコスモス 中村都子

15：00 休憩

15：20 再開

参加者との意見交換

17：00 **まとめ**

17：30 懇親会 大手町・サンケイ会館 地下2階 マンハッタンブルー

(地図を参照ください。)

問題提起

人を生かす 地域を興す ネットワークを拡げる
—女性の活力と叡智でJ Aに新しい風を—

J A人づくり研究会 代表
(社)J C総合研究所 研究所長
今村 奈良臣

I. 食料・農業・農村政策についての私の基本スタンス

1. 農業は生命総合産業であり、農村はその創造の場である。

- (1) 日本の土地と水を活かし、食料自給率45%への向上に全力を傾ける。
- (2) 国民に4つの『安』（安全・安心・安定・安価）の農畜産物・食料品を供給する。（但し、「安価」とは「値ごろ感」のこと。）
- (3) 水と緑で国民に豊かな保養空間と保健空間を創る。
- (4) 都市・農村の交流をさらに深め、特に青少年の農と食の教育力を培う。
- (5) 農村の伝統文化や先人の知恵の結晶を次世代に伝承し、豊かな心の拠り所を創る。

2. 食と農の距離を全力をあげて縮める

- (1) 世界一の健康長寿をさら伸ばすために望ましい食のあり方を追求する。
- (2) 食の安全性に対する国民の不信と不安を一掃するために、農畜産物の生産・加工履歴証明（トレーサビリティ）のシステムを確立する。
- (3) 農畜産物の流通システムならびに販売戦略の改革を通じて、食と農の距離を全力をあげて縮める。
- (4) 農業の六次産業化（ $1 \times 2 \times 3 = 6$ 次産業）の推進と、女性起業及び高齢技能者の智力を活かす。
- (5) 地域ブランドを確立し、地産地消地食、地域農産物による学校給食等、地域との連携を強化する。

3. 農業ほど人材を必要と・する産業はない

- (1) 人材とは5つの要素（企画力・情報力・技術力・管理力・組織力）の総合力である。
- (2) 『人多地少』の時代から『人少地多』の時代に決定的に変化したことを認識し、地域農業の新路線を方向づける。
- (3) 家督、家産（田畑・山林・家屋敷）の継承者はいても、家業の継承者は激減しつつある現実を直視し、新たな農業経営のあり方を追求する。
- (4) イエ（農家）からヒト（個人）に着目する時代になった。青年、中堅、高齢技能者、女性、新規参入者等のもつ個性と能力を再組織し、農業経

営の法人化をめざす。

- (5) 個々の経営のあり方に着目するだけでなく、平等原則から公平原則への転換の視点に立脚しつつ、地域農業・農村全体の新たな組織化と活路を追求する。

4. トップ・ダウン農政からボトムアップ農政への改革に全力をあげる

- (1) 中央集権的画一型農政の時代に終わりを告げ、地域提案型創造的農政を推進する。
- (2) 特に補助金制度改革の推進。中山間地域直接支払い交付金、経営所得安定交付金等は新しい方向を示す農政改革の起爆剤である。
- (3) 価格政策から所得政策への転換を図り、経営所得安定政策を農政の基本路線とし、公平性、公正性、透明性、公開性を堅持する。
- (4) 陳情政治、中央依存意識の徹底的改革と自己責任 (at your own risk) の原則に基づき、計画責任・実行責任・結果責任の所在を明確にする。
- (5) 国際協約に基づき、国際的に認められた政策、制度の枠組みならびに手法を前提とした政策体系を構築する。

5. 共益の追求を通して私益と公益の極大化をはかる

- (1) 日本農業の歴史的特質は共益の追求にあった（水利権・入会権・漁業権等）。
その現代的意義を明らかにし、諸資源の維持・管理・保全をしつつ、多面的機能に生かす。
- (2) 共益の追求はあくまでも手段であり、目的は私益（農業生産者の所得、生活水準の向上）の充実と公益（国民・消費者の受益）の極大化にある。
- (3) 農家という家督・家産・家業の世襲による長男社会構造を脱却し、農業経営者という優れた職業に対する自己責任の原則にもとづく自己選択の方向へ意識改革を徹底してすすめる。
- (4) 地域農業の総合産業化と農業経営・集落営農の組織化、法人化、企業化に全力を傾け「所有は有効利用の義務を伴う」「農地は子孫からの預かり物」という思想のもとに日本型農場制農業の実現を目指す。
- (5) 農協(JA)は地域農業改革の司令塔になり、共益の追求に全力をあげなければ、組合員からも国民からも見放され、存在意義そのものが問われることになる。

Ⅱ. J Aは女性正組合員と女性役員を大幅に増やし、J Aの活力の源泉にしよう

1. 女性正組合員比率の高いJ Aには活力がみなぎる。
2. 女性役員が多いJ Aは、女性の新鮮な目線と企画力で、J A管内の活力が、特に女性・高齢技能者の活力の発揮による、地域農業再生へのエネルギーに燃えている。
3. 女性が日本農業の半分(農業就業人口130万人、50%)を支えているにもかかわらず、正組合員比率は僅かに18%にすぎず、役員は僅かに738人(3%)に過ぎない。

(第25回J A全国大会決定。

正組合員の25%以上、総代の10%以上、理事等1JA当り2名以上)

Ⅲ. 女性の皆さん、手造りでよい。自らの地域と地域の多彩な農畜産物・食品、そして多彩な活動を全国に発信できる、美しい、ホレボレとする名刺を作りましょう。

名刺は情報発信の原点。役職の肩書きだけの名刺の時代は終わった。

Ⅳ. 「多様性の中に真に強靱な活力は育まれる。画一化の中からは弱体性しか生まれてこない。多様性を真に活かすのがネットワークである。」

V. “Challenge! At your own risk”

出過ぎた釘は打たれない。

「所長の部屋」にアクセスして読んでください。

原則として毎週書き、7月末で193回になり、71万人余の方々が読んでくれていると報告

を聞いています。

<http://www.jc-so-ken.or.jp/head.html>

第11回 JA人づくり研究会 パネルディスカッション コーディネーター・パネリスト プロフィール

(社) JC 総研客員研究員 **和泉真理**

1960年 東京都生まれ

東北大学農学部卒

1983年～2007年 農林水産省にて勤務

その間、農林水産大臣補佐官、女性高齢者対策推進室長、輸出促進室長、
外食産業室長などを務めた。

また、1986年から2年間、英国オックスフォード大学に留学し、ヨーロッ
パの中山間地域振興や環境保全政策について研究した。

2008年より (社) JC 総研の客員研究員。

現在は、農業と環境とを両立させる政策（特にヨーロッパ）、食料消費やフー
ドシステム、農業の若い担い手達を主な研究対象としている。

また、女性高齢者対策推進室長であった頃から、農村女性の団体やグループ
の活動に関わってきている。

著書:「食料消費の変動分析」(農文協)、「英国の農業環境政策」(富民協会)。

JA八戸 監事 **佐野 房** プロフィール

1944年 青森県田子町生まれ。

1972年 田子町農協・婦人部若妻部会長。

1973年 全国農協婦人大会「若妻の主張全国コンクール」最優秀賞

1982年 田子町農協婦人部長。男性組合員が反対する中、にんにくの加工事業
を手掛け、「にんにこちゃん」として商品化する。現在では2億円を超える
販売額となっている。

1996年 青森県JA女性協会会長、田子町農業委員

この間、JAの部会活動がその中心であり、「農業ほど男女差のない仕
事はない」という思いで女性組織をリードしてきた。

2001年 JA全国女性協理事。

2005年 JA田子町理事、黄綬褒章受章。

2007年 JA田子町常務。

2008年 JA田子町専務。

広域JA合併に際して、「たっこにんにく」のブランドを守り、減資
率が下がらないように工夫をし、組合員を説得した。

2009年 JA八戸監事。

これまで、「人づくり」、「土づくり」、「産地づくり」という「3づくり運動」という考え方で、女性部の活動やJAの事業運営に当たり、地域ブランドの「たっこにんにく」を守り育てる原動力となった。

花巻・理事 高橋テツ プロフィール

1950年 ・岩手県花巻市生まれ

1971年 ・岩手県職員（生活改良普及員）

1974年 ・湯口農協勤務（生活指導員）

1979年 ・第11回全国家の光大会普及文化活動にて「全中会長賞」受賞

1989年 ・花巻市農協勤務（花巻市内7農協合併による）生活指導員

1997年 ・「母ちゃんハウスだあすこ」オープン 初代店長

1999年 ・花巻農協勤務（1市3町の農協合併による）

生活指導・産直・グリーンツーリズム・子育て支援等担当
（国の事業導入・新製品開発等）

2006年 ・交流サポーター登録（農水省の施策に基づく女性農業支援制度）
・認定農業者登録（退職を控えぶどう栽培を計画し農地取得）

2007年 ・花巻農協退職

2007年～2009年

・日タイ経済連携協定（JTEPA）プロジェクトにJICA 専門家として携わる

8回の渡タイ（述べ320日） 生活改善指導・マーケティング担当

2010年 ・(株)ハヤチネフーズ勤務（花巻農協100%出資の子会社）

全国のファーマーズマーケット中心に販路拡大、売り上げアップを目指す

2011年 ・JAいわて花巻 理事

組織も職場も女性たちが主体的に活動することで活性化が図れる事を信じJA女性部、女性職員の活動をサポートしてきた。

「母ちゃんハウスだあすこ」は生産者、スタッフ共に女性が中心となり立ち上げた。稲作中心の農業生産者の意識改革、消費者との顔の見える販売、スタッフ間の連携等先進事例がない中での課題は大きくその解決には日々奔走したが同じ目的の元に其々にコミュニケーションが出来た成果は大きい。

「母ちゃんハウスだあすこ」が全国のファーマーズマーケットの仲間をつくり、産地間交流で販売促進が進んだ。また生産者、消費者の憩いの場となって

いる事で地域に開かれた農協として認識されてきている。

現在、ぶどう生産者としてまた、農産物の多面的活用のため、自宅に「菓子・惣菜製造」の許可を取得し、後継者と共に新たな取り組みを開始。

今後は JA 役員として地域、女性の声を正しくキャッチし、JA 運動に反映させていきたい。

JAあづみ 総務開発事業部福祉課 **池田陽子** プロフィール

昭和43年（1968年）鯉渕学園卒業

昭和43年（1968年）あづみ農業協同組合に生活指導員として入会

昭和49年（1974年）第6回全国家の光大会体験発表において「全中会長賞」受賞

平成3年（1991年）JA長野中央会へ出向

平成10年（1998年）総務開発事業部福祉課新設 課長代理

平成12年（2000年）総務開発事業部福祉課長

平成18年（2006年）退職後、引き続き主に助け合い活動、元気高齢者活動、「生き生き塾」など生活活動を担当

平成19年（2007年）安曇野市ブランドデザイン会議福祉部会長

平成22年（2010年）JAあずみくらしの助け合いネットワーク「あんしん」副委員長

「助け合いネットワークあんしん」を発足させ、有償在宅サービスに取り組んだ。

元気な高齢者の生きがい活動として、参加者の自主運営によるミニディサービス「あんしん広場」が地域に多数展開されている。

また、「生き生き塾」を立ち上げ、生きがい農業支援の場としての直売所開設、「菜の花プロジェクト」の取り組みを進めた。

「あんしん」は、平成18年に第59回JA長野県大会で「優良組合員組織」表彰を受け、平成19年にはJAグループでは初の毎日介護賞（毎日新聞主催）を受賞。

併せて、平成22年・第19回「若月賞」を受賞。

JA コスモス 福祉生活部 **中村都子** プロフィール

昭和 58(1983)年から生活指導員

昭和 61(1986)年「はちきんの店」開設にあたり、役員の反対に会いながら、女性部の後押しで開設にこぎつけ、現在では県内に 5 店舗、大阪・東京へも出荷している。

翌年、農業技術を習得して良心的な生産者となるための「ここ掘れワンワン塾」を始め、女性が経済的に自立する道を開いた。

その後、お金の使い方など学ぶために、女性部に「ちいばっばスクール」を開き、組合員の学習や楽しみ、明日への活力の場作りを進めてきた。

年には次世代の人を育てるために、「あぐり3スクール＝キッズ・ミドル・ライフ」を企画するとともに、JAの中に生活指導事業を定着させる方途を考えた。

平成10年に助け合い組織「ニコニコ会」ができると、会員それぞれの特技を生かした班活動を進めた。

特にユニークなのは、男性による助け合い組織「赤い禪隊」を組織してきたことであり、そのことによって女性組織の活性化も図ってきた。